

資料紹介 伊藤大輔『映画「祇園祭」 ——物語の輪郭——』

京 樂 真帆子*

解 説

映画「祇園祭」（1968年11月23日封切り）は、16世紀、自治に目覚めた京の都市住人、すなわち町衆が、多くの困難を乗り越えて祇園会（祭）を再興する過程を描く時代劇映画である。中村錦之助、岩下志麻、三船敏郎、田村高廣らが出演し、「時代劇の父」と呼ばれる伊藤大輔（1898～1981年）から山内鉄也が監督を引き継ぎ、独立プロの日本映画復興協会が製作した。京都府が、この映画を府政百周年記念事業に位置づけて製作協力している。

表「映画「祇園祭」関連資料一覧」を参照しながら、この映画の成り立ちを説明していこう。

映画「祇園祭」は、1952年に京都の学生たちによって製作・上演された紙芝居「祇園祭」（表-1・2）に端を発している。この紙芝居にインスピレーションを得て、西口克己が小説『祇園祭』（中央公論社、1961年 表-3）を書いた。その後、伊藤大輔がこの物語に興味を持ち、映画化を模索し始める（伊藤大輔「祇園祭と流人」（『キネマ旬報』第313号、1962年）表-4）。京都文化博物館伊藤大輔文庫所蔵の林屋辰三郎『町衆』（中公新書、1964年 表-5）には、読書の時期は不明ながら、伊藤大輔が赤鉛筆で傍点を打ち、メモを書き込みながら祇園会復興の歴史を学んだ痕跡が残っている¹⁾。

「企画」という立場でクレジットされる伊藤大輔が執筆した小冊子『映画「祇園祭」——物語の輪郭——』（B5版よりやや小さめ・全62頁 表-10）は、梗概の形を取る。伊藤大輔「「祇園祭」始末」（『キネマ旬報』第484号、1968年）に「製作頓挫の期間中に、私は或る部門からの要請により『映画祇園祭・物語の輪郭』と題する小冊子を執筆した。」とみえる、その小冊子である。表紙・裏表紙が深い赤色のこの本を、伊藤大輔自身は「赤本」と呼んでいた。

この「頓挫の期間中」というのは、中村錦之助が映画製作の延期を京都府に申し入れた

* きょうらく まほこ 滋賀県立大学

表 映画「祇園祭」関連資料一覧

	タイトルなど	発行年・月・日	備 考
1	紙芝居「祇園祭」	1952年5月5日	歴史学研究会大会において上演される。1952年6月27日改訂の使用台本は、田中聡氏所蔵。
2	民科京都支部歴史部会製作・林屋辰三郎述『祇園祭』 (東京大学出版会)	1953年7月10日	紙芝居最終版。 伊藤大輔文庫は初版本を所蔵。
3	西口克己『祇園祭』 (中央公論社)	1961年3月30日	以後、出版社を変えながら、重版。 伊藤大輔文庫は初版本を所蔵。
4	伊藤大輔「祇園祭と流入」 (『キネマ旬報』第313号)	1962年6月	
5	林屋辰三郎『町衆 京都における「市民」形成史』 (中公新書)	1964年12月19日	以後、重版。 伊藤大輔文庫所蔵本(初版本)には、自筆書き込み多数あり。
6	映画「祇園祭」未定稿Ⅰ	1967年9月ごろか (「映画「祇園祭」製作経過と日程」による)	八尋不二執筆、か。 伊藤大輔文庫、京都学・歴史館所蔵。
7	映画「祇園祭」未定稿Ⅱ	1967年10月ごろか (「映画「祇園祭」製作経過と日程」による)	八尋不二執筆、か。 伊藤大輔文庫、京都学・歴史館所蔵。
8	「映画「祇園祭」物語の輪郭」 (第一草稿)	1967年11月～1968年2月、か	「シナリオ作家協会用箋」19枚・「伊藤大輔用箋」54枚 ※200字詰め 伊藤大輔文庫所蔵。封筒に分割封入。
9	「映画「祇園祭」物語の輪郭」 (第二草稿) ※「自筆草稿」	1967年11月～1968年2月、か	「伊藤用箋」160枚 ※200字詰め 伊藤大輔文庫所蔵。
10	「映画「祇園祭」物語の輪郭」 (印刷版) ※「赤本」	1967年11月～1968年2月、か	62頁。 伊藤大輔文庫、京都学・歴史館所蔵。
11	映画「祇園祭」梗概	時期不明 1968年か	加藤泰執筆、か。 伊藤大輔文庫、京都府立図書館所蔵。
12	宣伝パンフレット	1968年2月21日 (「映画「祇園祭」製作上映協力会幹事会総会資料」による)	「あらすじ」(原作ダイジェスト)掲載。 伊藤大輔は「この映画を撮影するには」を寄稿。 「山本明コレクション」、伊藤大輔文庫、京都学・歴史館、京都府立図書館所蔵。
13	原脚本(3分冊)	1968年 1:8/16(伊藤大輔入手) 2:8/18(同上) 3:8/27(同上)	鈴木尚之・清水邦夫執筆。 伊藤大輔文庫所蔵。 撮影現場で配布された1と3は、おもちゃ映画ミュージアムも所蔵。
14	原脚本(部分合冊)	1968年 伊藤大輔入手日不明	上記3分冊を合冊したもの。 伊藤大輔文庫所蔵。
15	原脚本(最終版)	1968年9月1日(伊藤大輔入手)	撮影台本。『シナリオ』(24-11)に掲載。流布本となる。 2段階バージョンも作成された。 原本は伊藤大輔文庫にあり、広く配布されたものを「山本明コレクション」、京都学・歴史館、おもちゃ映画ミュージアム、映画村・映画図書室所蔵。

1967年11月1日（『映画「祇園祭」製作経過と日程』）から、映画の宣伝パンフレット（表-12）が発行された1968年2月21日（映画「祇園祭」製作上映協力会幹事会総会資料「活動日誌」）までの間のことと考えられる²⁾。この後、加藤泰による脚本が企画されたが（表-11、か）、最終的には、鈴木尚之と清水邦夫に脚本執筆が依頼され（表-13・14・15）、それが映画となった。

伊藤大輔は、評論家竹中労とともにこの映画の発案者の一人であったが、途中で監督を降板してしまった。B班の監督として撮影に参加していた山内鉄也が監督を引き継ぎ、伊藤大輔のアイデアの一部を映画の中に取り入れている。また、鈴木尚之と清水邦夫が、原脚本（最終版 表-15）の段階で、「赤本」を参考にして原脚本（3分冊 表-13）から変更した部分もある。しかし、伊藤大輔の製作意図の全体像がそのまま映画として実現されることは無かった。

言い換えると、この小冊子「赤本」には、伊藤大輔が1962年当初から温めつづけた映画「祇園祭」の構想が記録されていることになる。つまり、「赤本」は、伊藤大輔の頭の中にあった幻の映画「祇園祭」を伝える唯一の資料である。

表に示したように、本小冊子は、京都文化博物館内伊藤大輔文庫（以下、伊藤文庫と略称する）および京都府立京都学・歴彩館（以下、歴彩館と略称する）に各1冊ずつ所蔵されている。

伊藤文庫所蔵本には、伊藤大輔自身によって様々な書き込みがなされている。ホチキスの針が抜けた痕跡が2カ所あり、冊子の中心の1枚、つまり4頁分が脱落している（後掲、注31参照）。

一方、歴彩館所蔵本の1ページ目には、「京都府立総合資料館蔵書印」の朱印とともに、「故蜷川虎三氏旧蔵図書 宮井思葦子氏寄贈 昭和五十九年四月二日」という朱印が押されている。つまり、この本の旧蔵者は、映画製作時に京都府知事であった蜷川虎三氏であった。残念ながら、書き込みなど読書の痕跡はない。

時代劇映画及び伊藤大輔研究に資するため、以下「赤本」（『映画「祇園祭」——物語の輪郭——』）を翻刻する。伊藤文庫所蔵本（以下、伊藤文庫本）を原本とし、自筆書き込みを注で紹介する。欠落部分は歴彩館所蔵本で補う。

伊藤文庫には、この小冊子の手書き草稿が2種類ある（表-8・9）。つまり、伊藤大輔の思考の軌跡を二段階の草稿から確認することが出来るのである。その二段階目の草稿（表-9）は、4桁のナンバリングが施された200字詰め原稿用紙（伊藤用箋）160枚に書かれているが、途中で途切れている（後掲、注53参照）。本翻刻では、「赤本」印刷直前のこの第二草稿原稿を「自筆草稿」と呼び、その一部を注の中で紹介する。

本資料は、活字（和文タイプライターか）印刷されたものであるが、伊藤文庫本の自筆書き込み、および、この自筆草稿と合わせて考えると分析の意義がある。印刷段階のミスを見出すだけでなく、先述したとおり、伊藤大輔の思考の軌跡がわかるからである。

なお、本翻刻は、自筆草稿との文字の異同全てを指摘するものではない。例えば、活字本

(伊藤文庫本・歴彩館所蔵本)は、自筆草稿の旧仮名遣いを新仮名遣いに直しているが、本翻刻ではいちいち指摘しない。

なお、本資料にみえる歴史的事実に対する誤解などについて、その全てを指摘することはしない。詳細は、拙稿「映画『祇園祭』と歴史学研究 ——「祇園会じゃない祇園祭」の創出——」(『人文学報』第115号, 2020年)を参照されたい。

本稿執筆に際しては、京都文化博物館の森脇清隆氏にご高配を頂いた。心からの感謝を捧げる。

凡 例

- 一、伊藤大輔文庫所蔵本を原本とし、その脱落部分を京都学・歴彩館所蔵本で補った。
- 一、原本は縦書きである。段落前の空行、句読点の位置、() と [] の使い分け、及びおどり字は原本のままである。但し、読点「、」は「,」とし、リーダーは6点リーダーに統一し、段落の揃え方など原本で不揃いの形式は、適宜統一した。
- 一、伊藤大輔自筆部分を含め、常用漢字に直したところがある。
- 一、誤字と思われるものも原本の通りとし、ルビで「ママ」と傍書する。これ以外のルビ・傍書は、原本に付されている通りである。
- 一、伊藤大輔の筆跡で判読不能のものは■で示した。後考を待ちたい。なお、原本の伊藤大輔自筆部分は、特に指摘する以外は鉛筆書きである。

表紙

映画「祇園祭」

—— 物語の輪郭 ——

伊藤大輔

本文

○現代の³⁾京都市街の大観(東山か如意ヶ嶽からの鳥瞰景)

市街の夜景

等々 —— の実写の上に、大要左記の如き解説の声がかぶせる

[京都！

この美しい都市⁴⁾

千年の古都と親しみ呼ばれる此の都会が、過去の歴史の間に幾度戦火に見舞われて焦土と化し、幾度その死灰の中から不死鳥の如くに蘇ったか。しかも、その復興は、常にこの都の住民たる市民みづからの力によって行われ、連綿今日にまでその精神と実績を受けつがれて来たのであるという事を果して市民⁵⁾の、そうして日本人の何人が知っているであろうか？

此の映画は、そうした歴史の真相を「祇園祭」という虚構の⁶⁾素材に托して物語ろうとするものである]

表題 「京都府政百年記念映画」

物語の初めに ——

「都を制する者は天下を制する」武門の抗争の無⁷⁾台となつて、応仁・文明⁷⁾ノ乱を中心に、前後半世紀にわたつて断続した戦乱のため、京都の町は幾度と無く一望の焼野原となり、殆ど壊滅的な打撃を蒙り続けたが、その焦土の中に雄々しく振り立って、再び都の繁栄を築いたのは、この都の住民たち —— いわゆる「京町衆」と呼ばれる階級の人達であった。

自衛組織を作つて野武士・群盗の来襲に備え、土一揆・徳政強訴の劫略を撃退し、或いは幕府の不当な徴税を拒否し、「頼まず、頼まれず、町のことは一切、町衆自身で始末する」おのづからなる自治体制が形づくられ、当然、事毎に幕府との間に摩擦と軋轢を生じていった。⁷⁾

挙句 ——

そうした町衆の昂揚した意気とエネルギーが、幕府当局の圧力と触発して華と開いたのが、復興祇園会の山鉦巡行一件である。

幕府は、次第に増大し次第に深く根を張って行く町衆の自治制と、その経済力を抑圧しようと図り、祭執行の認可と引換えに莫大な献納金を要求した⁸⁾が、町衆は肯んじようとしない。ならば祇園社に命じて神事を停止せしめると威嚇したが、町衆の方では「神事コレ無クトモ山鉦渡シタシ」⁹⁾と突っ撥ね、幕府は最後の切札として、飽迄強行するなら武力を以て巡行を差止めるぞと恫喝した。さすがに町衆も此の宣言に動揺した。

献金説

中止説

延期説

等々、論議の末に仲間割れを生じ、幕府が提示する反対給付の好餌に釣られた富商階級から脱落者を出す始末にまでなつたが、零細企業の商人・職人など中・下層階級の大部分は、死を賭してもやろうとの決意を固め、所司代の武士や傭兵、僧兵どもの妨害に屈せず、遂に山鉦巡行の快挙を`血、を以って達成した。これが、打続く戦乱のために中絶していた祇園会の行事を五十年振りに復興した「京町衆の勝利の記録」の大意であり、映画「祇園祭」は此の記録の

上に立ちます。

但、右の`大意、そのものにしてからが、すでに、歴史¹⁰⁾の正しい再現ではなく、多分に史実を歪曲し、原作を乱暴に改変し、映画化に都合のいい様に繕らえ上げた`物語、であることを予めおことわり申しておきます。

当時（一五〇〇年頃）——

四条大橋はまだ架けられておらず、三条・五条両橋の間の鴨川河原には「流民」とも称すべき雑多な難民が粗末な掛小屋に雨露を凌いで無統制な集団部落を形づくっていた。

罪科を逃れて出奔したもの、当ても無しに京を目指して来た喰詰め者。

媚を売るクグツ女や歩き巫女の類。

放下・蜘蛛舞・軽業などの街頭芸人。

——等。

いづれも戸籍を失くした宿無しで、在来の京都人はこれらの連中を「河原者」と呼び、住居内に立入ることを許さなかった。

また——

京町衆の氏神である祇園社から八坂ノ塔へかけての一带に、祇園社に隷属する祇園神人の一族で「弦召」と呼ばれる集団が住んでいた。

祇園社は、王城鎮護の法城比叡山延暦寺（通称山門）の支配に属し、弦召の作る武具、兵器類（弓・矢・沓その他）は主として此の山門の僧兵たちの需要に応ずるもので、その材料として扱う獣骨・皮革類の餘剰製品である弦、紐、革緒等を市内に売り歩く際の「弦召そッ（弦や紐、買いませんか）」の呼声から部族全体の通称となった。

殺生禁断・肉食禁忌の戒律を重んずる当時の仏教思想から、一般市民は弦召との接触を極端に忌避した。同じ祇園の氏子でありながら此の不当な市民のあしらいに対する弦召の宿怨は父祖累代にわたって彼等の血肉のなかに深く、重く、黒々と沈み澱んだ——なぜ、世間は職種によって人間の尊卑を品別しなければならないのか？

尚、また一ツ——

京町衆に対し宿命的な憎悪感をもって対立するものに大津の馬借の一団がある。彼等は、表向きは極端なる同族的、結束と特異な生活様式の馬を使役する輸送人足なのであるが、鈴鹿山脈系の山窩の一豪¹¹⁾族が、平地に定着したもので（夙¹²⁾・カ¹³⁾ブリとも呼ぶ）常に固写¹⁴⁾して□¹⁵⁾民と交はらず、京都人は□□¹⁶⁾彼等夙・セブリを敬遠¹⁷⁾し、落武者上り、お尋ね者、野盜崩れなど、いづれも無宿無籍の無法者揃いで、その不軌放埒な行状が、秩序と安寧を重んずる律的な京町衆との間に、累年、事毎に兎角の摩擦を生じ勝ちであったし、京都を荒しまくる土一揆・徳政騒ぎの背後には常に彼等の「影」があった。馬借連は騎馬戦に長じ、その凄まじい機動力は町衆の自衛団を圧倒した。

（河原者にも幾段階かゝり、最上層の河原者は築庭、造園の特殊技術者として「阿弥」号を称し、所謂室町文化に寄与するところが尠なくなかった。しかし彼等の存在を取上げると、上流の支配階級と密着しているその特殊性が不協和音となって全体の調和を混乱せしめるので、映画の上で「阿弥」の一類は抹殺することにした¹⁸⁾。

それとは逆に、馬借についてはその特異性を特に強調し、京都市民との確執をことさら誇張して扱うのも、此の物語の虚構の図式設計にもとづいての必要からであります）

○年代を大凡、一五〇〇年前後とし、祇園会の復興を、一五三〇年代（天文初期）に仮定します。

○「京町衆」の形成とその発展経過を物語の展開に絡ませて説明することをしないで、既程¹⁷⁾の事実¹⁹⁾として取扱う。これは筋の繁雑化を避け、祇園会復活を中心にした一本の話に絞るためであります。

○撮影の実際上の関係から、各山鉦所有²⁰⁾の町名を明示せず、また、すべての各鉦町が全員一致で山鉦巡行参加に決定する迄の経過には迂餘曲折、逡巡あり、脱落あり、小説とも史実とも甚しく背反する設定を敢てします。関係各山鉦町内の方々に特に御諒承を乞う次第であります。

○劇中に使用のセリフは、時代相を表わす目的から「狂言」の言葉遣いを採用。但、純粹の狂言詞は現代人の耳に疎いので、適宜に取捨塩梅して、平易に意味の通ずるように心がけます（この事は脚本の上での扱いについてゝあり、この梗概形式ではそれに拘わらず）

プロローグ

○現代の山鉦巡行の実況

その描写の上に、次々とクレジット・タイトルを重ねる
重ね終って——

表題「祇園祭」

あらすじ

—— その（一）祇園会復興まで²¹⁾

○画面は、いきなり、凄絶な市街戦の描写から展開される（管領細川澄元に対する同族細川高国軍の夜討ち）

騎馬戦

白兵戦

澄元軍敗退して巖栖院に籠る

高国軍、殺到、包囲して石火矢を射て焼き立てる

巖栖院炎上

〔室町幕府の将軍家継承問題に端を発した応仁・文明ノ乱に引続いて爾来約五十年半世紀の永きにわたって京都の町は絶ゆる間も無き戦火の舞台となった〕

○火は京の町々に延焼する

逃げ惑う市民たち、或いは乱戦の馬蹄にかけられ、或いは流れ矢に中って僵れる者。焼け落ちる家屋に押し潰される者。発狂する者……²²⁾

○阿鼻叫喚の地獄絵の果て

余燼天に漲ぎる業火の跡に、点々累々の死屍

〔そうした内紛から足利幕府は次第に衰退の一途を辿り、将軍職は有名無実の空位となり、最後には難を避けて京都から脱出し、近江・淡路等の国々を転々しなければならなくなった〕

○将軍一族の都落ち（十二代足利義晴、時に亀王丸と称し、未だ九歳）

こゝに掲げた〔説明〕と○場面点描は、シナリオの抜粋乃至ダイジェスト版としてのものではありません。映画「祇園祭」の輪郭とそのイメージ。並びに製作意図の大意を知って頂くための便覧に過ぎません。左様に御承知願えますよう——右、念の為め。

○焼失する市街地区

古版地図の諸所方々から火を発して、その焼跡が黒々と残る

○満目荒涼たる焼野原となり果てた京の市街——その上に字幕を重ねる

汝や知る

都は野辺の夕雲雀

あがるを見ても

墜つるなみだは

○京の外れの山越えに、低□²³⁾、願望、焼野²⁴⁾の市街を後にして去り行く女の一群

[そうした荒廃と焦土の中に残された京の市民は、その死灰の中に立ち上り、その焼土の上に新しい町と自分たちの生活を、自分たちの力で打ち立てたのであった]

○建設点描

杭を打つ

縄張りをする

棟をあげる……等、^マ々。洛中再興の建設風景

○市街地区

なお随所に広大な焼失区域が残されている上に、字幕を重ねて——

T=一五一〇年

一五二〇年

一五三〇年

市街地にはなお点々と焼失部分を残しながらも、年代と共に次第に旧に復して行く

○復興した新市街の景観

工人たちの生業の種々相

立売場の賑わい

振売り

大道芸人、くゞつ女の類

[市街の再建と生産の復興にともない、諸国の難民もまた京へ京へとむらがり寄って来た]

○四条河原

広い河原を三筋ばかりの川水が流れ、中洲には低い板橋が架けられてある

河原にさらす染物——その流域の末に流民たちの群居部落が建つ

[将軍は京から逃げ出した儘であったが、京に残されていた幕府の政庁は、町の復興にともなって再び勢威を盛り返し、再び庶民の上に武力と権力を揮い始めた（管領は細川高国）]

○幕府政庁・表門の構え

門から進み出て来る所司代の市中見廻り組（開鬪）

○町中を押し歩くその隊伍

虎の威をかる開鬪の横行振りに、或いは怯え、避け、或いは媚び諂らい……後姿に唾する町の人々

[そうして、また、京の町の繁栄にともない幕府の権勢の高まるにつれ、禍わいは再び都に向って集中し始めた]

○繖える「徳政」の蓆旗

[幕威の及ぶ圏内にある近畿地方は苛斂誅求の対象となり、それに抵抗する徳政一揆・土一揆が随所に蜂起した]

○土埃を捲いて押寄せる徳政要求の農民群

○傘連名状

[徳政とは、人民に恩恵を施こす仁徳の政治という意味で、過重な夫役と租税を免除し、一切の貸借関係を廃棄して無効たらしめよとの要求を掲げて幕府に強訴する集団行動である]

○幕府政庁

怒濤の勢いで押寄せた大集団は、侍所の警備を圧倒して門扉を押開いて雪崩れ込み、大玄関先に坐り込む

管領細川高国を中心とする幕府要路の鳩首協議

役人が玄関前に出て来て容認の書状を読上げる

一揆の面々、歡呼乱舞

[最初の一揆が成功して徳政令の発布を獲得すると、幕府の非力と弱体を伝え聞いた他の地方の徳政強訴も次から次^{ママ}えと京へ殺到した]

○保津川の急流を、筏を連ねて下る丹波の農民団（松火）

○松火をかざして市中を行進

○政庁の門前に松火の山を築いて大篝火として威嚇し騒ぎ立てる²⁵⁾

○京へ出入りの七ツの街道のコースを地図の上に次々と指示する。その各々から京へ進撃する一揆群

奈良方面からは般若坂越え

和泉からは木津川沿い（曳舟）

摂津からは大江越し（牛車）

近江からは山中越の栈道を——

〔やがてにそれは、徳政訴願を表面の口実に、京の町に蓄積された裕かな物資を目的に入浴し、土倉・酒倉等の富商を襲撃して質物を持ち出し、証書類を焼き、或いは家財を略奪した上、証跡を湮滅する為に家屋倉庫を打毀し、火を放って引揚げを慣いとするに至った。謂わば、群盗と選ぶところの無い暴状をほしのままにしたのである〕

（土倉は質屋＝高利貸で、酒屋・麴屋などと共に町衆中の代表的な富商）

○その暴状の描写

○そうした狼藉の最中に、どこからともなく肅々たる笙のひびきが起こる

暴徒たち、それに気附いて、はっとなる

○笙を吹く女（シルウエット）

女はあやめ。笙は所司代の出勤を告げる合図である。これから以後の数場面に於いても、馬借一味の加担した騒擾の際には、その警告と進退の合図にアヤメの笙は吹き鳴らされるが、その理由と彼女の素性はなお暫く秘密の儘にせられる

○馳けつける開闢の一隊

○潜んでいた馬借隊が、闇から湧き出た様に姿を顕わし、引揚げの一揆の連中を援護して開闢をさえぎり縦横無尽に暴れ蹴散らす

○町の一方に火の手が挙がる

〔幕府には群盗化した一揆の暴挙を制圧するだけの力が無く、災害は悉く市民の側に負わせられ、町衆の自衛はまづ防火の協同作業から始まった〕

○非常呼集の鐘（六角堂）が鳴る

染物工場で仕事の中の職人、笹屋新吉たちが警鐘のひびきに顔をあげる

桶屋の助松が仕事の手をとめる

鍛冶屋の釘十と相槌の弟子が仕事を抛り出して壁にかけられている消防着に飛びつく

建築中の屋の棟から徳松たち大工仲間が馳け降る

○「月行事」の札の掛った和泉屋の前に常備せられた防火用具の手桶類が、馳け集まって来る町民の手で持ち去られる（女子も協同）

○堀川の水を手桶リレー

○火事場の防火作業

チグハグながらほゞ揃いの防火着で身を固めた新吉初め、それに女手も加わって活躍する

[ついで彼等は自分たちの町を自分たちの手で護るために自衛した]

○町内ごとに木戸をつくる

柵で固める

見張番用の火見櫓が立つ

○思い思いの装備に身を固めた自警団が巡回する（共通の黒の頬当て）

[それに対抗するように常に一揆と気脈を通じ、時としては略奪暴行を掩護して所司代の兵と戦い、また時としては町の自衛団の虚を衝いて手引きの役までつとめる騎馬の覆面の一隊があった]

○物見櫓の見張番が鳴子の綱を引く（各町内の木戸に連導されていて次々に鳴り出す）

○見廻り中の自警団が踏みとまって見廻らす

○馬借の一隊が柵に近づいて打毀しに掛った瞬間である。鳴子の音にはッと手を控える

統率者「一文字、²⁶⁾の紹介（鼻梁から耳へかけて頬を真一文字に走る刀痕）

笙のひびきに頭をめぐらし

「退き口は、あちらだッ」

と指す。一同、飛乗る

○笙を吹く女の影絵

○馳けつける自衛隊、また一隊

○馬借、自衛隊に前後を挟撃され、苦戦の末に遁れ去る

○溶暗する笙の女のシルエット²⁷⁾

—— その（二）祇園会の復興

[遂に町衆は勝った。次第に結束を固くし、次第に拡充した自衛力によって一揆の来襲は次第に終熄し、漸やく京には安寧が訪れた。そうして、その勝利と平和と繁栄の象徴として祇園会復活要望の気運が次第に町衆の間に醸成されて来たのであった]

T=天文元年（一五三二）

○光彩陸離たる祇園会図の屏風（洛中洛外図及び祇園会図屏風絵に倣う）

○下京六十六町の京町衆寄合いの席上

屏風図について物語る支倉屋玄齋（上層町衆中の最長老格。貿易業者。法体）

「祇園会と云っても、若い人たちは話に聞いて居ても見た事は無し、齢とった我々とても夢の様にしか覚えては居ない。応仁・文明の乱以来の合戦続き。そのまた戦さの合間

には徳政だ、土一揆だ、焼討ちだと災害続きで、そのため山鉾渡しも御祭礼も五十年近く中絶されていたのだからな……それを、やろうという。やろうではないかという相談なのだが」

相談は異議無くまとまって、来年の夏に挙行と極ったものゝ、そこには幾多の難問が控えていた。

まづ、第一に——

各町内の鉾や山で、戦火の為に焼失してしまったもの、破壊されたもの、部品の殆どが失なわれたもの、等々。それらの補修なり新調なりをどうするか。

また——

半世紀の空白の間に正調の脈絡を失ってしまった祇園囃子。

山鉾の一ツツに独自の極った囃子があって、互いに競い奏していた、その山鉾毎の特長のある奏法の伝統が廃絶に帰してしまっている。それを何を基準にして再現復活することが出来るか？

最後に——

費用。一切が新規蒔直しの、この龐大な経費をどうするか？五十年以前までは、祇園会地口銭の徴集で賄なう慣例だったが（山鉾巡行の道筋に店舗を持つ氏子だけが、店構えの大小に按分して費用を醸出する）

今度は²⁸⁾それを改めて全町民が各自の分に応じて——富商階級から長屋住いのその日稼ぎに至るまで、財力のある者は財力を、無い者は無い者なりの労力を出し合って、一人洩れ無く参加する、と申合わせで極った。前例を破った此の取極めは、同じ氏子である筈の一人一人に

「自分たちの祇園会だ。オレたちみんなのお祭だ！」

という誇りと喜びと、平等の連帯感を深めた。

○祇園会復活についての伺いと意見を求められた祇園社にはもとより異存のあろう筈も無く双手を挙げて賛同し、執行（玉寿丸^{シギヨウ}）は、その実現の為に進んで指導の役割を果そうと町衆たちを激励した。

○京の町は沸き上がった

○桶職人の助松は本業の車大工として、長刀鉾の大車輪の製造に取組む

○半壊の船鉾は此際に、御朱印船の天竜寺船型に改装することになり、大工の源太と釘十が中心となって設計を練り、小模型の作りに掛かる。

○菊水鉾は烏有に帰していたが、その町内の人々は年寄役の丹波屋伝藏（材木商）の主唱で、

新規に超大型の鉦を建造することになった（昭和 41 年新造完成の事実に擬えて四百年前の創建に溯らせる）

- 放下鉦は御神体の放下僧を失くしていたので仏師、人形師たちがその復元に精魂を傾むける
- 鉦、山ともに胴懸、前懸、水引、見送り等々の飾り物類が焼失、破損したのが多く、その補修や新調の注文に応じて西陣の機場には活気が漲った（空引機その他の実動描写）
- 染物屋の職人である笹屋の新吉も多忙を極めていた。染め・晒し・織場との連絡に走り廻る一方、手猿楽のアマチュアで、笛の巧者だった彼は、祇園囃子の喪なわれた古正調の探求と復元とも一役買っていたのである
- こゝで山科言継卿が登場する。卿は当時、藏人頭²⁹⁾であったが、博識・多才。時に乞われ、ば自ら藁籠を抱えて長屋へも療治に出掛けて来るという、殿上人の杵から喰み出した特異な^{ヒトナリ}為人で、だから同好の手猿楽で見知り越しの新吉から祇園囃子の一件で相談をかけられると、期するところがあるらしく
「心得である！」
と気易く即座に引受けた。

○或る夜

新吉が呼ばれて言継卿の屋敷に伺候すると、折柄、荒れ果てた庭先の茂みの蔭に坐った女の姿が仄見え、そこから笙がひびいていた。言継卿は笙の音律を笛に移してはそれを採譜していたところであったが、新吉に命じて、座にある摺り鉦でそれに合わせさせた

○一区切終えると女は一礼して、しづかに庭先から姿を消した

女はあやめで、裏木戸の外に待っていた権次（侍童）を従えて去った。

新吉の不審に応じて、卿は、

「京ではあの女ひとりだけが、祇園社に古くから伝わる神楽の正調を受けついでいるのだ。

その韻律を笛と鉦に移しとって祇園囃子の基調にしたい考えなのだ」

「祇園社に所属している御神楽巫女か何かでございますか」

「いや……とにかく一応、曲の完成するまで、女のことはそれ以上は聞かないでおけ」

と厳しく云い渡された。

○新吉は山科邸を辞去しかけて、ふッと女の匂いを嗅いだ……裏木戸の近くに香袋が落ちていた。謎めいた女の素性が烈しく新吉の好奇心を捉え、仄かに垣間見た面影が瞼のうちに焼きついた。

○祇園会復興の計画が着々順潮に進行し、町に景気のたぎり立っている時、突如、將軍帰洛の旨が触れ出された。

將軍不在の京都で幕府政庁を預っていた管領細川高国は、全国の戦火のやゝ緩んだのと、都の復旧とを絶好の好機と見てとり、永く地方に逼塞していた足利十二代義晴を迎えて征夷大將軍の權威を再び京に樹立せんとした。謂うなれば、京町衆の犠牲と努力によって復興した京都にヌクヌクと入り込んで再び権勢の座にアグラをかこうという虫の好い魂胆なのである。

- 將軍義晴は高国に迎えられ、十何年振りに京の地を踏んだ。都落ちの時、まだ十歳の童児だった彼は、一望の焼野原から今日の隆盛に立直った京の町を見て瞠目し狂喜したが、高国は笑って云う

「町人どもは働蜂の様なもので、せっせと働いて巣を作り、その中に甘い蜜を貯えるものでございます。どうやらその溜った甘い蜜を取上げてもよろしい頃合かと存じまする」

- だが、高国の考えは甘過ぎた。

十分の武備もとゝのわず、強力な政治的基盤も無しで、天下りの的に一片の政令でもって強権を發動しようとしても、艱苦に錬えられて来た京町衆は昔ながらの腰の弱い京町衆ではなくなっていた。

「祇園会を再興しようとするまでに繁栄して来ているのだから、此際、^{ヂシヤン}地子錢（宅地稅）を従前に倍増して納めよ」との幕命に対し

「この繁栄はいさゝかも幕府の援助によらず、町民の自力によるものだから倍増納入の理由が無い」

と、受付けないばかりか、これを機会に、従来とかく幕命の下達機関に近い存在だった町組役員の構成を改める意見が勝を制し、町行事、頭役、総代等を町民の自由選挙で改選した。今や京町衆は自治体制へ一步を進める迄に成長したのである。

結論として、

「これまで徴發されて来た地子錢も納入の義務を認めない。爾今廃止」

とまで強硬な態度を示した。

しかしながら、幕府と結託して、地位を築き、産をなして来た富商階級中の「長老」連は容易に事大主義から脱け切れず、従って零細企業の商・工業者や職人たちの層との間に意見が喰い違い、紛糾し、対立し……遂には危うく「分裂」しそうな形勢にまで立至った時——「山科討廻わし」が突發した。

- 累年の凶作に苦しんでいた京の隣境山科郷は、幕府の苛政に喘ぐ近郷を糾合して大集団となり、徳政令を要求して起つらしいとの飛報が伝わった。

幕府は周章した。

將軍が帰洛したというだけのことで、それに見合うだけの軍備もとゝのわ無いところへ、一揆の徒党と対抗して、万一、僅かなる手持ちの兵力を損じでもしては一大事である。

時国は京町衆の自衛組織に目をつけた。土一揆が乱入して略奪と放火を恣しまゝにすれば再び都は焦土となる。祇園会どころの話ではない。官民一隊となつて一科一揆を挫かなければならない時だ。

町衆は幕府の要請に応じ、共通の敵に対して防衛に起つことを約した。

○時に、早くも一揆の先鋒は宵闇に紛れて八坂近くまで潜行して来ていたが、此の時もまたあやめの笙が鳴って、討手の軍勢の出勤を警告した。

○たまたまその時新吉は、言継卿の使いで、囃子の笛の注文に清閑寺の笛作りを訪ねて行った帰途、八坂ノ塔の上に笙を吹く女性の姿を見た。

「笙を吹く女……もしや言継卿の許で見掛けた女では？」

しかし、何の為に、こんな場所で笙を？

新吉が不審を懐いたその笙のひゞきの合図によって意外に早い幕府軍の出撃を報らされた一揆の前哨は、直ちに滑り石越えを山科へ退却し、幕兵に指揮された町衆の自衛隊は、逃ぐるを追うて山科郷へ雪崩入った。

○新吉が我が家に帰りついた時には、市民軍はすでに出勤してしまった後だった。新吉はほつとして「助かった！」と安堵の胸を撫でた。

実は、途中で、仲間たちの進軍に出喰わしかけると、見つからぬ様に身をひそめてやり過ぎて帰って来たのである。

彼は平凡な、小心な、一染物職人に過ぎない。口論・争闘を好まず。仕事以外には音曲を嗜なむ程度の、謂わば怯懦な性質で、町の寄合いでも人の背後に隠れる様に小さくなっていて、かって一度たりと自分の意見など述べたこととて無い男だ。つきあいに自警団に出ることさえ気が進まないのだが、ましてや合戦などとは考えただけでも身がすくむ。

手機の織子である母（お染）と、まだ小娘の妹（お鶴）は、新吉が仲間外れになることの懸念から、自衛団の武装を取揃えて急ぎ立てるので、新吉は拠どころ無く身支度をして仲間の後を追うて行った。

○「山科討廻シ」と呼ばれる此の一戦は酸鼻を極めた。

幕府の狙いは一揆の先制制圧では無く、徹底的な壊滅掃蕩にあり、同時にまた京の市民軍の弱体化を図る点にあったので、その戦略によって市民軍は最強勢な農民部隊に立向かわされた結果、双方死力をつくして討ちつ討たれつの死闘を展開した。

一方、侍所の幕兵は、戦闘に加わらないでいる無抵抗の老若男女までその住居から追い立て、無差別に殺戮し、火を放って家々を焼払った。

○仲間におくれて、やっと現場へ到着した新吉は、戦闘の苛烈さに怯えて立竦んだが、彼一人だけが客観的に情勢を判断の出来る戦闘の埒外に立たされているため、次第に幕軍の奸策に眼が開かれて行った。

新吉は覚った！

「町衆と山科郷が戦っているのぢやない。幕府のためにお互い殺し合いをやらされているのだ。山科方がやつつけられたら、次には町衆がやられる番なんだ。敵は幕府だ！」

○折柄、明け放れて行く逢坂山の彼方から朝霧を衝いて騎馬の一団が殺到して来た。急を聞いた大津の馬借隊が救援に駆けつけて来たのである（率いるは馬借の女首お辰姥³⁰⁾）

馬借の来援に戦況は逆転し、山科方は忽ち盛返して反撃に出た。

形勢不利。今や撤収の潮時と見てとった幕軍は、予定の作戦通り、京町衆を見棄て、ひそかに戦線から離脱して行く。

それと知った新吉は

「やめろッ。引揚げい！ 犬死にだぞッ」

とわめきながら味方の悪戦苦闘の間に分け入ったが、劔戟と馬蹄と雄叫びの中に彼自身も捲込まれて、結局は自分も手槍を揮って農民軍と渡り合い、阿修羅の如く荒れ狂った。

○新吉と女首お辰姥との決戦

○一文字、と新吉の運命的な対決の一瞬

○戦い果て、……余燼に燻ぶる山科盆地

○山科から引揚げて来た市民軍は和泉屋の酒蔵に戦傷者を収容し、応急の療治場とした。主治医格で一同に指図しながら、手当てに大童の言継卿。

呻吟

慟哭

釘十は左足を切断しなければならぬかも知れぬ。

○そのうちに薬が不足して来た

途方に暮れた言継が、ふッと思い出して

「そうだ！ あすこにある。祇園社の造兵司のところに秘伝の妙薬がある筈だ」

新吉が聞き答めて

「造兵司？」

「うム。山門の武器の製造所だから、戦さの際の疵薬やら何やら一通り揃えて貯えている筈だ。分けて貰って来てくれ」

「祇園の……弦召で御座いますな？」

「左様。弦召頭の伊平に頼むのだ」

相手を弦召と聞いて新吉は気が進まなかったが、言継卿の手紙を持って使いに立った。

○祇園社。

その境内の外れから山手へかけてつらなる弦召の住居群落。

杵作り、弓矢、弓弦等の製造に携っている状況。

○新吉は弦召頭の伊平の住家を尋ねて行く途中で、あやめと侍童権次とをチラと見かけた——様に思った。

が、咄嗟にあやめの方で素早く姿を晦ませたので確認は出来なかった。

○伊平は用件を聞き、頭ッから痛罵を浴びせかけた。

「常日頃、人間の種でも違っているように扱かい、対等のつきあいもしないでいて、何を虫のいい頼みだ。そもそも山科では誰の為に誰を相手に戦ったのだ。京への物資を搬んでくれる、謂わば命の綱の馬借衆を、人非人の、悪党のとさげすんでいるが、その人で無しの馬借衆が、なぜ山科一揆に加勢したのか考えても見たか？

不道あしらい、埒外呼ばわりされている儂等と同類の馬借衆と戦うて、さてその傷薬をくれるだと？

あるとも、薬は……だが喃、お公卿さんの頼みだろうと何だろうと、京町衆に呉れてやる薬は無いワ」

○打ちのめされて返す言葉も無く、悄然と去って行く新吉を、物蔭から見送っているあやめの眼があった。

○使命を果せず、酒蔵の収容所へ帰って来た新吉に、妹のお鶴が息せき切って追ッかけて来て、薬の詰合わせを手渡し「誰からとも名前も何も判らないけど、`薬だ。と云って子供が家へ投げ込んで行った」と云い

「このお薬、きっと良く効きそうよ。堪らない好い匂がしている。ほれ！」

○薬を包んだ薄絹に沁みているあやめの香の移り香が新吉の鼻を刺した。

○金閣の苑池

銀閣の結構

——数奇を凝らしたそれらのいづれかの一室に、支倉屋を筆頭にした長老連の六、七名が畏っている。

お飾りものに過ぎない將軍義晴は上段の御簾の彼方にあり、時国とその側近が長老連に応待して

「山科討廻しにおいて、侍所の武士に優るとも劣らぬ町衆の働き殊勝である」

と、褒賞として茶器類（唐物）が下賜される。

○総寄合い

論議の末、改選役員の確認

（支倉屋³¹以下の長老連は依然として権威の座にとどまる）

地子銭拒否の確認——幕府への通告は長老連の担当として押しつけられる

- その通告を受けた幕府では、町衆への報復手段として、京都への街道の出入口に、改めて新関を設置し、在来の関門に於いても関税を倍増して物資の搬入を制限し、糧道を断って町民を屈服させる方針を定めた。

○但——

米が無くては商売が成り立たない麴座と酒蔵の一部に限り、官米に準ずる（特別免税証）を特別に交附して保護する。文句はあるまい！

質屋・金貸し業の土倉は、窮民が出来ればますます商売繁昌だから、これもまた文句はあるまい！

（一部特定の富商階級はこうした秘密協定によって関税倍増案の内示を呑んだ）

- 抜討ち的な発令の実施に、京街道の関門では、到る所で恐慌を起した。

○逢坂の関で——

紅染に使う原料の茜草と紅花を伊吹へ仕入れに行った新吉とその仲間は倍額の関税を要求された。商売用とは云え、是が不足で、山鉾の飾物の染織物が手詰りに成っている……が、理屈は通らない。`紅一匁は金一匁、と云われる程の高価な品だけに

「即座に規程通りの金額が支払えないとあれば、現品を没収して預りおく」

と言渡されてはどうにもならない。

そこへ米俵を積んだ大津馬借の一隊が `一文字、に率いられて通り掛り関役人に遮られる一文字

「何にイ、通行税だと？俺達ア米を売りに行くんぢゃない。頼まれて運ぶだけの商売だ。通り抜けて行くだけにどうして関銭がいるのだ」

役人

「規則だ。これより以後は（新しく樹った高札を指して）高札に新規に取極められた品物を京へ持込むには、物にも人にも関税がかゝるのだ」

「品物になら何層倍なとかけるやイ。一日いくら、一里なンぼうの日当で運んで行く人足が、それぢやア稼ぎがファイにならァ」

「規則だ」

「それぢやア俺達を干乾しにしようってのかい」

「規則だ」

「よーし！（仲間に）損してまで運ぶ馬鹿は居らんぞ。米が要るなら注文主の方で（米俵の名札）おれ達の通行税なり関銭なり悉皆支払うからって話のつくまで、此奴ア大津まで持って帰ろう」

○あわてる役人を尻目に、馬首を回らしかけるところへ、水口屋の宰領が馳けつけて、役人に「免税通関」の証文を示して内談する。役人は帳簿に照らし合わせて勘校符を確かめ、応諾する。

宰領、一文字に向い

「これは官米だ。お上の兵糧米を、御用のある時まで水口屋が保管の役儀を承っている大事な米なんだ。お役所の御用米だぞ。さア搬んでくれ」

「おれ達の通行税はどうなるんだ」

「規則は規則だ」

「おれ達の方にも規則があつてな。大津馬借は通行税は払わないって規則を、今つくったところだな」

「こちらが支払ってやらないと運ばないと云うのか」

「規則は規則だからな」

役人が割って入り

「御用米を持帰るの、運ばないと！制札をみろッ。官命に抗すればどういふ厳罰に処せられるか解らないのか」

一文字、仲間を見廻わして

「なア、どうする？運賃は京で後戻いって約束なもんで、一文も貰って居らぬが、いッそ此処まで搬んで来た日当を棒に振って、米だけ渡して引返すとするか？（全員賛同）よーし！」

仲間は敏速に米俵を馬から卸して木戸際に積上げ始める。

一文字、介添役の手児（お辰婆の娘）から槍を受取り

「おう、此の場で渡してやるから受取れやイ。それほど御大切な御用米が水口屋の蔵の中で兵糧米になるか酒に化けるかは、俵の中の米粒だって御存知なかるう。それッ、受取れッ」槍の穂先を米俵に引っかけ、関の木戸越しにヒョイヒョイと投げ飛ばす。俵は坂道を次から次へ転がり弾んで落ちて行く。

○新吉が見ている。

○立売り場

○振売り

○商店街

等□³²⁾々（既出）店を閉^マじたのもあり，商品も乏しくなって，賑わいも沈んでいる

〔第一に主食の米穀類，ひいては日常の必需品まで不自由になり，市民は生活に不安を感じ始めた。此儘だと折角意気込んだ祇園会もどうなることかと……〕

○子供だけはそうした不安にも関わり無く，鉾の模型を曳き，囃子の真似事をして遊び戯われている。思いなしか再び威勢を取返した感じの開鬨たちが，往來の妨げだと，邪慳に子供たちを突きつけて押歩く

○蹴飛ばされて路上にくつがえり毀れる模型の鉾や山

○「こうした不安な状況で祇園会が遂行出来るか？」が，集会での大きな問題となった

「地子銭の一件が幕府を依怙地にさせて，この食糧難を招いたのだ。この儘では祭どころの話ではなくなるが……」³³⁾

「いや，米は京都にダブついている。来年の仕入れ分の米まですでに買付け済みの麴座，酒蔵³⁴⁾の元締衆が，その余剰分を放出さえしてくれれば問題は解決する」

「倍増しの関税を払って買入れた米を元値を切ってまで——」

「いゝや，ある特定の人たちにはその関税さえ払わないで御用米並の——」

「そんな戯けた事が許されるものかどうかの判断ぐらい——」

「許すも許さぬも最初から幕府と狎れ合いで」

「証拠があるのか！」

「誰が証明する？」

○新吉が起った

「私が，逢坂の関で，ある酒屋さんの宰領と役人衆とが，特別の免税手形についての談合を，この眼で，耳で，確かめて居ります」

寄合いの席上で，衆人の前で，はっきり口を利いた，これが新吉の「第一声」であった。言いながら口はわなゝき，声はかすれた。握りしめた拳は汗にぬめり，顫えていた。

一座，肅然。

釘十が松葉杖をついて起ち上がり，長老たちに指を指しつけて

「あなた方は山科討廻して御褒義を貰いなすった。わしの此の片足や，死んだ大勢の仲間やらの働きのお蔭で徳政一揆・土一揆は鳴りをひそめた。京の町はもう二度と一揆騒動で焼かれる心配は無い。あなた方だけで無くわしらも御褒義を貰う資格があるのだ」

「何が欲しいのだ」

「地子銭の廃止！ 地子銭の廃止，地子銭の廃止だ」

助松が，深く，重く，しづかに

「そこで³⁵⁾，話を極めようではないか。地子銭を払う組と，払わぬ組との二ツに！ そうして，

飽迄地子銭を払わぬ覚悟の者たちだけで祇園会をやり抜こうではないか」

- 支倉屋を³⁶⁾筆頭とする富商特権階級と雖も、下層階級の人間³⁷⁾を失うては町衆として立つては行かない。

地子銭の納入拒否ということは「京町衆は足利幕府を相手とせず、町は町自体でやってくる」——自治体制の宣言に外ならない。その勇気と栄光の「確認」こそが、祇園会再興の新しい目標として掲げられたのであった。

- 町は活気を取戻した。

助松の仕事場

一本足になった釘十の鍛冶場

菊水鉾の新造

船鉾の改装

西陣の織場

染工場……河原の布晒し……等々。

- 山科邸では、あやめの笙を主奏に、言継の笛、新吉の鉦、それに右中将斎院師実（虚名）が鼓を持って加わり、ほゞ現在の

「コンコンチキチン、コンチキチン」

の囃子に固まりかけて来ている。

言継、採譜の筆を擱いて

「三位どの、如何でしょう、此の調子では？」

「結構。祇園神楽の古拙な趣きが見事に新しく蘇ったようで」

「忝う！（あやめに）永々御苦勞であったな。では一まづこれで……」

依然、荒れ庭の茂みの蔭に身を隠して控えていたあやめ、一礼して影の如くひそやかに去り、裏木戸で権次を呼ぶ声……居ないらしく、手を拍ち、呼ぶ。

言継、それと気附いて

「子供が居ないらしいが……笹屋。物騒ゆえ、そなた、そこいらまで」

新吉、心得て急ぎ出て行く

三位師実、不審して

「あの女性は？」

「祇園の造兵司頭の娘でございます」

「弦召の？ おゝ、それゆえ庭先に控えさせられたのか。如何様」

○山科卿の屋敷外

待ちくたびれて、うろつき廻っていたらしい権次が、築地の外れまで急ぎ帰って来て、はつと足を停める。

○新吉とあやめ

「山科討廻しの後で、どなたからか傷薬を頂いたと云って届けに参り、その節、薬を包んだ薄絹に籠っている香の匂いから、てっきりそなたの志と知れた……忝のう」

「ほんに可愛い御妹御さまで」

「いや、あいつ、礼儀知らずの野育ちで」

「野育ちでも人の子は人の子」

「え？」

「妾などは犬か猫か。生れついて四ツ足扱い、誰が妾など人間並みには……」

「そうは思わぬ。私だけは決してそうとは……（懐を探り乍ら）その証拠には、こうして肌身離さずに」

匂袋

あやめ、受取ろうと手を伸べて、指と指とが触れ合うて……絡み合わんとす。

権次が呼びかける。

「お嬢。帰ろう」

○それより先

新調する菊水鉦と、船鉦改装の工事場では資材の不足、とりわけ特に長大な巨木の入手難に直面していた。

鉦は、謂うなればそれ自体が御神体なのだから、寸法さえ間に合えばどんな材木でもよいという訳にはいかない。

かねて予定されていたのは江州坂本の日吉神社の神域から伐り出してあった巨木であるが、坂本から京へ運搬する街道は大津馬借の縄張りである。

馬借に対する京都市民の蔑視と嫌悪には抜き難く根深いものがあり、それが先般の山科討廻しで正面切って激突して以来、公然の讎敵同士となってしまった。

とは云え、結局は「金」で話のつかない筈はあるまい、当って砕けろと衆議一決して、中組の中行事が大工と共に神木運搬の交渉に大津へ出向いた。

○ところが、馬借の方の要求は「金」は二ノ次の問題で

「馬借の元締であるお辰御嬢の潰れた片眼を元にして返せ。それが第一条件で、そうして絶対条件だ。まづその解決が^{ママ}ついた上での事にしよう」

と切出した。

お辰の失明は山科討廻しの乱戦中に受けた傷に由来していた。出来ない相談と極めてかゝつての云いがかりである。

- 山科から戻って来た連中によって交渉の経緯報告が行なわれている会合の席へ、時間におくられて這入って来た新吉は、聞くにつれて愕然、色を失った。

馬上のお辰に手槍を投げつけたのは新吉だったのだ。しかし、それがお辰の眼に的中したかどうか迄は見届けていない。たゞその為にお辰が落馬したのは眼前の事実であり、次の瞬間に新吉は「一文字、と刃を交えていたのであった。

- その一夜、まんじりともしなかった新吉は、未明。一通の手紙を残しておいて、母と妹の眼覚めぬ先に家を出た。

祇園社の社頭を過ぎらんとして立停って祈念しているのを、折から仲間の弦召たちと境内の清掃につとめていた権次が見かけた。

- 蹴上げ^{ママ}のあたり、明けて行く京の町々、山々を「恐らくはこれが見納めか」と見返り勝ちに大津へ急ぐ新吉の後から、見えかくれに権次が跟けて行く。

（この時の新吉は、まだ小心な一職人に過ぎない。一市民としての厳しい連帯観念の発露と云うよりは、素直な性情に発した「償い」の気持の方が先立っての決意だった）

- 馬借の厩舎では一文字たち男の仲間に混ってお辰の娘の手見も馬の世話をしており、近づく新吉に気付いて用件を聞くなり一文字を呼んだ

「例の坂本の御神木を京へ搬んで貰うために、御姥^{おんばア}の片目を返しに来たと……」

「どうやって返す？」

「潰れた眼を元通りには出来ないゆえ、自分の片目を抉り取って、せめてそれで償いをつけて貰えたらと、それを頼みに」

「御姥は山科で落馬した折の打ち身で、あれ以来、足腰が起たず、甲賀の塩野の湯治場へ療治に行った切りだ。使を出して姥どのの意見を聞くまで此処で待っている」

- 湯治場から担架で舁かれて帰って来たお辰は新吉を見て

「あの乱戦の最中ぢゃによって、顔の見分けはつかぬがの、手に見覚えがある。あの時おれに手槍を投げつけおったのは此の手……染物の藍に染った手ぢやった。その槍をかわそうとして馬から落ちた……但、おれが此の目を潰されたのは（楯間に掲げた一本の矢を指す）あれぢや。落ちたと同時にあの流れ矢に刺されたのぢやから、直接この野郎^{わろ}の所為とは云われまいが——」

部屋に詰めかけていた馬借たちは一斉に喚き出し

「怪我をさせた当人では無いにせよ、馬から落としたのは此奴ぢや」

「此奴の矢では無かったにせよ、恨み重なる京町衆の一人であるからには同罪だッ」

「いや、此奴が御姥を馬から落したので流れ矢にあたったのだから下手人も同然だ」

「そうとも！ 此儘ノメノメ生かして帰されるかッ」

「京の連中への見せしめに手なり足なり叩ッ挫いて戸板送りにしてやれッ」

お辰は連中の激昂を制して

「それでお主、町衆と談合の上、クジ取りにでも負けて出掛けて来たのか」

「いや。手前勝手の分別で、誰一人に相談も無しで」

「よし！ その覚悟なら（矢を取寄せて鎌を火で炙り乍ら）お主の目玉と引換えに、坂本の御神木は京へ届けてやろう」

「忝のう……」

若い者たちが押しかぶさって新吉の腕を掴んでお辰の面前へ突き出した時、あやめが権次を先立て、「待って！」と戸口に駆けつけて

「坂本の材木には、もう御用が無くなったのよ」

○あやめの語るところによると、材木商の丹波屋が生れ在所の丹波中を探し廻って、到頭打ってつけの木材を充分なだけ探し当てた。

○保津川上流

今、巨大な丸太筏が組まれつゝある。

○お辰姥が大口あけて、ケラケラと笑って

「泣かせる喃、この若い衆の覚悟は！ 腰抜け揃いの京者の中に見上げたものよな。この御姥が若けれや搦ッてはおかぬところだが……男が女の子に惚れられるには、根性も根性ながら、それでも矢張り目の玉は二ツとも揃うとる方が好かろうテ。この矢のことは無かった話にするぞ」

○お辰、新吉に矢を渡す

○保津川の急湍に飛沫を揚げて大丸太の筏が下る。丹波屋をめぐって大工たちの晴々しい顔。

○粟田口のあたり

大津から帰りの新吉とあやめ。

丸山方面への岐路に立停って、あやめ、別れ去ろうとして

「では……」

「しばらく！ すんでのところを助けて頂いたお礼に、改めてお伺いも致したいし」

「御無用！」

「せめてお住居の近くへまでゞも御一緒に……この儘では気残りで別れられぬ。是非」

「犬猫同然の住居へなど……内蔵頭さまが御存じです」

「信継³⁸⁾卿は何一ツ仰せられないので」

「では内蔵頭さまの仰せ出だされるその時節まで」

「いゝえ、是非、これから！」

あやめ、ほだされかけて、一瞬、ためらったが、新吉の持った矢（お辰姥の）を、颯ッと取って、二人の間の路上にヒタと置くと、身を翻して走り去る。

○路上の矢

○いよいよ後一ヶ月ほどに迫って、町は祭の前景気に沸く

町々には祇園囃子の稽古が夜毎に行なわれ、鉦に乗る稚児たちの神事舞の練習が開始された（稚児は、現行の人形ではなく、故実通りに長刀鉦以下全部の鉦に一人づつ搭乘^{ママ}）

○斎院師実邸

（言継卿邸に較べて、はるかに宏大であるが、荒廢の状はいづれ劣らず^{ママ}）

座敷からずッと離れた庭先に、若い者二人を控えさせて、年老いたくゞつ師が師匠役として舞い、縁先に立った四人の稚児（平服）がそれにつれて舞う。

師実は言継を相手に酒をくみ乍ら、口拍子手拍子を取り、時に手振りを交えつゝ、くゞつ師や稚児に駄目押しをする。

（くゞつ師への取次ぎは、縁下に控えた雑色が承わり、師実は直接には言葉を交わさない）

侍童に案内されて、包みを携えた新吉が入り来り

「稚児たちの著る長絹の内衣の色でございますが」

と、五、六種の彩色をしたデザインに実物の端ギレを添えて差出す。

師実、検分して

「鉦の種類によって白衣の色がどう極められていたか、正確に覚えているのはあの年寄たちだから……」

丁度、舞の稽古が一区切ついたところ

新吉が気易く

「ではあの者たちに検分致させまして」

と腰を浮かせて手招きする。

師実、中啓で裾を押え

「ならぬ！（と意外に厳しく制止し、雑色に命じて`庭先に畏こまるくゞつ師達に持って

行って意見を聞け、と指図して）笹屋！あれらはもとは能狂言の一座にいた役者だったにせよ、身分を破って河原者の境涯に堕ちたくゞつ師の分際ぞ。内蔵頭どのの懇野³⁹⁾で門内への立入りを差許しは許したものゝ……」

「恐入りまする」

言繼、とりなす様に笑って

「麿は別ぢやぞ。法外人ぢやからの。する事なす事、殿上人としては言語道断の沙汰ばかり……慎しむべし、慎しむべし」

「はい。心得ていながら、ツイ……」

「ハ、ハ、ハ。そのツイぢやがの。心得ては居てもツイ取返しをつかぬ始末に□□⁴⁰⁾生涯の一大事になろうやも知れぬことがある。笹屋、女に気をつけよ」

「は？」

「判っている筈！」

言繼、笙を吹く格好を示す（それへ現実の笙のひゞきが遠くからかぶさる）

○築地の外れの物蔭にうづくまって笙を吹くあやめ

遠くの曲り角に新吉が姿を現わす

あやめ、しづかに吹きやめる

新吉、ちょッとためらったが……馳寄って来る。あやめ馳け迎える。

双方、無言で目を見交わす

「どうして、此処へ？」

「三位さまのお屋敷へお越しと聞きまして……お待ち致して居りました。実は大へんな事を……」（物語る）

○將軍義晴がお忍びで八坂ノ塔に昇り、京の町を見渡して「室町どの、花の御所と謳われたわれらの邸宅も再建覚束無いと云うのに、町衆共の繁栄は僭上の沙汰に過ぎはせぬか」と色を作したのに対し、管領時国が答えて「心得て居ります。その時節が到来致しましたゆえ、万事お任せを……」

その時節と策というのは祇園会の許可と引換えに——そう洩らしたのを、塔に潜んでいた権次が聞いたのだった。

○將軍は御簾内で碁盤に対して居る。

呼出されて来ている町組の有力者・長老連中十人ばかりが遙か末座で時国から内示を受けている。

○町衆の集会

その十人ばかりの有力者メンバーが上座に並んでいて

「祇園会の再興をやるほどなら將軍家の御所の再建費を負担せよ」

「飽迄地子銭を納めず、幕府の存在をないがしろにする所存なら、こちらにもこちらの考えがあるぞ」

と恫喝せられたと報告し、一同の意見を求めるが、助松、釘十たちのグループは承服せず、激論の末、助松と釘十は憤然として席を蹴て起つ（新吉は再び貝殻を閉ざして積極的な発言をしない）

お鶴が傘を持って兄を迎えに来る。

○助松と釘十、闇討される。（二人が会議の席から中座した時、近くに待機していた四、五人の暗殺者（覆面）が尾行して行く。）

相合傘で帰路について新吉が発見した時、助松は左腕をやられていて氣息奄々。釘十はすでに絶命。

お鶴を励まして、六角堂の鐘を鳴らしに走らせ、通りかゝった仲間に助松を医者へ担ぎ込ませて、ひとり釘十の耳に囁く

「オレがやる。オレ一人でもやる。必ず祇園会の山鉾は渡して見せるぞ」

非常を知らされて駆け集って来た人々と共に、戸板に乗せた釘十に引き添って、集会所へ引返して行く新吉の頬を濡らす涙と雨。

○侍所

縁先の雨中にうづくまる暗殺者たちの前に一聯の銭が投げ出される。

○町の有力者たちは再び政庁へ呼出された。

支倉屋は御朱印船の渡海免状が要るのか要らないのか？

丹波屋は老ノ坂の関所を無視して、密かに保津川を筏で下って荷揚げをした。

和泉屋は——

柳酒屋は——

水口屋は——

「いづれも幕府の存在を無視してそれで押通す覚悟か●⁴¹⁾押通せるつもりか？

返答は……そうだ、十三日の宵宮の日までに決著^{マア}せい。祇園会の挙行を許す許さぬはその返答次第による」

○すでに町では山鉦巡行の用意が最後の仕上げに入っていた。

助松の相棒たちは協力して長刀鉦の大車輪を完成した。

新装の菊水鉦は、まだ装飾なしの白木の儘ながら、ほぼ組み上り

新設計の船鉦は、船尾の部分と帆柱の取付けだけが未了

放下鉦、その他昇山も準備にかかる

○十一日、選ばれた稚児たちの位貫ひ行事

○その午後、長老連につながる有力者メンバーは、又もや総会を招集して「幕府に従うか。従はないか。祇園会が許されるか、許されないか」を賭ける最後の大評定である。

やるか？

やらぬか？

急進的な強硬論の代表だった二人——釘十は殺害され、助松は左腕の自由を失った。

次の番は誰だ？

それでもやるか？

やらないか？

押し殺されたような沈黙を破って新吉が起った。

「山科討廻はしの犠牲者たちを無駄死にさせ、今また釘十を、助松を、見殺しにしてそれでいいのか。

一致団結したオレ達の力を見せるのは、今、この時——幕府の云い分を撥ね返して、飽迄祇園会を遂行すること、大事はただその一点にかかっているのだ。

オレはやる！

全員反対でも、オレ一人でも、命をかけて鉦綱を曳いて進むぞ」

弁口の不得手な新吉が、訥々、切々の熱弁を揮っている折しも、祇園社から急使が駆け込んで来て

「今、政庁から、明日執行に出頭せよという召喚状が届けられた。恐らく、祇園会の神事に就いては、一切町衆の相手になるな、という申渡しに相違なからうと考へられるが、実はかねてからその指令は薄々ながら予期されていたことなので、逆にその先手を打って、今宵のうちにも御輿洗いを行ない、三基の御輿⁴²⁾をお旅所まで鎮座奉安してしまつて万一に備えておくべきだと考えるが、町衆側の受け入れ方はどうなのだろう？⁴³⁾」という緊急の提案である。

事は焦眉に迫った。

一座騒然。

祇園社の神事なしでは祇園会は行うことが出来ない。

どうしても挙行するつもりなら、兎にも角にも神社からの申入れに応じて神輿を御旅所にまで

奉安し、既定の事実を作り上げておく方が……しかし、もし、祇園社に対し幕命を以て神事停止を申渡されたら？

甲論乙駁

逡巡狐疑

ただボソボソ、ガヤガヤと……

新吉が叫ぶ

「これが祇園会なら、祇園会としての神事も要ろう。祇園会だからこそ、幕府は許すの許さぬのと云う。だが、何も、祇園会でなくてもよいではないか。お祭だ、お祭だ……京の町衆のお祭なんだ。オレ達のお祝い、オレ達の賑やかし、オレ達の勝手なお祭騒ぎなんだ。だから神事にこだわらず、神事はなくとも山鉦を渡そう！

京の町衆のお祭騒ぎを幕府に停め立てせられる謂われがあろうか。やろう！神事を抜きにした祇園会⁴⁴をやろう！」

是は詭弁である。しかしこの詭弁には、みんながそうでありたいと渴望している真実があり、新吉自身、詭弁を弄しているつもりはない。彼のシラ真剣な熱弁が、そうした「嘘」を観客に感じさせないまでに高揚しなければならない——そのように演出され演技されなければならないのである。

「やろう！」

「やるぞ！」

大勢の赴くところ、長老たち上層部も（内心はともかく）押し流されて、ともかく挙行に同意した。

○神輿の動座が触れ出されると、そうした総会の高等政策によらない大多数の町民は、かねて割り振られた自分たちの部署（迎え提灯、鷺踊、等々）の準備にどよめき立った

○新吉が神輿迎いの身支度に急いで我が家へ帰りついた時、かって伊吹へ茜と紅花の買出しに同行した染物仲間の多兵衛が旅姿のまま慌しく追って来て、商用の帰途、大津で容易ならぬ風説を聞き込んで来たと云う。

山科討廻しの報復をたくらむ大津馬借が、祇園会を好機に大挙来襲して山鉦巡行へ撲り込みをかけるとの取沙汰である。

聞くなり新吉は咄嗟に決心して言継卿の屋敷へ走った。

「あやめにかかづろうと取返しをつかぬ事になるかも知れぬと注意した筈だが」

「はい●⁴⁵ただ、此の度の用件は誓って私事の為ではございませんので」

「そうか●⁴⁶八坂ノ塔を目当てにたづねて行けばよい」

言継卿は初めてあやめの住居を明かした。

○夕焼に聳える八坂ノ塔

○塔の見える真葛ヶ原の外れで新吉はあやめに逢った。

「馬借衆のあの気性だから銭金づくで思惑は変えなからうが、もし金で話がつかなければ、祇園祭の所事が終了した上で、何なりと望み通りにしようからと、その交渉の仲立ちを頼まれて欲しさに……」

「なぜその役目を私に？」

「お辰御姥との一件で、そなたの口利きで私は助かった。大津の馬借はそなたの云うことは一も二もなく聞いてくれた。だから今度の交渉も……」

「なぜ私の云うことならあの連中は聞いたと思う？」

「知らぬ。しかし……山科討廻しの折、山科方の先手が此のあたりまで忍び込んでいた時、京の軍勢が出動するのを、そなたはあの塔の上から見定めて、すぐに合図の笙を吹いて逸早く山科へ退却させた。いや、それ迄にも、徳政一揆の騒動には、極って馬借隊が介在していて、侍所の武士たちに戦いを挑んだが、その出撃や引揚げのきっかけには必ずそなたの笙が鳴った。事情は解らないが、そなたと馬借との間には特別の関係があるらしい」

「当たり前よ。私は馬借の味方だもの。そうして馬借たちだけが私達の味方だもの。それやあ馬借は人間の屑の集まりよ。屑は屑でも、それでも人間は人間よ。弦召だって人間よ。それを、あんた達は、弦召、馬借は人間じゃない。人間の外のもの、外道、犬畜生の同類と見て世間並みにはつきあわぬ。だから私たちには京都の奴らはみな敵なんだ。だから馬借衆は、敵の京町衆をやっつける一揆強訴にはいつでも進んで助勢して一緒に京の町を荒し廻る。だから私も一役買って一揆と馬借を助けて来たのだ。でもネ、馬借が人非人扱いせられ始めたのはまだ精々こゝ、一、二代この方よ。私たち弦召が畜生並みの没義道な扱いを受けて来たのは遠い昔の先祖から何百代、何千年来のしきたりなのだ。その怨みと憎しみが、京の奴らに判るものか！」

「判るとも！」

「判るものか、誰一人！」

「そうでない男だってあるのはあるのだ」

「どこに？」

「こゝに！」

眼と眼

「あやめ！」

「信じない」

「信じなくともいゝ。わしは……わしは自分で信じているのだ」

「何を？」

「わしは……あやめを好きなんだ」

(この間の機微、文字にては尽し難し)

「わたしも！」

二人は轟と抱き合い、よろめいてバランスを失ない、崖の斜面を抱き合ったまゝズルズルと滑り落ちる。

滑って落ちついた丈なす叢の中に二人の身体は重なり合った……

——刹那に、あやめは新吉を突き放した

「誰が……誰が信じるものか！ あやめを——あやめの身体を欲しければ、四ツ足の世界にまで墜ちて来い。弦召の仲間にも墜ちて来い。そうして自分の母親や妹のところへ、これが自分の女だと、これから直ぐにも連れて行け！」

叩きつける様に一気に云い放ちながら、迫り来る夕闇の中、あやめは卒然として地に伏して咽び泣いた。

○その同じ頃

燃えさかる大小の松火が祇園社の石段を駆け降り

お迎え提灯の火の海の中へ神輿はしづしづと昇き出され

鷲踊の舞手は大きく羽搏いて前途に舞い進んだ……

○政令に応じないばかりか、公然と反抗の挙に出た町衆の態度に嚇怒した時国は、非常手段によって祇園会を頓挫させようと侍所の頭人赤松則宗に命を下した。

○その結果——

まづ、新装成った菊水鉦が襲われ、西陣業者の労作になる装飾品金竜を剥奪されて、無惨な素地の剥き出しにせられた。

○改装された船鉦は、新設計の船尾部を叩き毀され、帆柱を切倒されて無恰好な残骸となった。

○放下鉦も危うく破壊されようとして助かったものゝ折柄鉦の上で太平ノ舞の予行演習中だった稚児が白刃で脅かされて傷ついたので、怯気づいた稚児の親は家族ぐるみ市内から逃出して姿を晦ました。

○長刀鉦だけは町衆の懸命な抗争で暴徒を追払い、辛くも倒壊を免かれたが、真木柱が折れ曲り、鉦頭に立つ三条小鍛治宗近の長刀が傾むき揺らいだ。

○馬借の祇園会襲撃の流説を耳にした時国は、密使を大津に走らせ「山鉦巡行の擾乱に乗り出してくれるならば……⁴⁷⁾」と、逢坂ノ関の関銭の特別免除を餌に話を持ちかけさせたが、お辰御姥は笑って取合わず「約束の空手形で無しに現ナマでなら」とねばって、万一の用意に使者が携えて来ていた金囊を底までハタかせた上で、内諾した。

○十二日 —— 十三日

鉦は建ち終り

昇山は飾られ

おくれ走せ乍ら、巡行決行の象徴として、遂に斎竹が四条の大通りに立った

○—— が、

その勢いと賑わいとは別に「宵山」当日までに返答を求められていた挙行か中止かの決着が、度重なる侍所の執拗な妨害によって動揺を続けた。

放下鉦には稚児が逃げて居なくなり

長刀鉦でも、放下鉦の稚児の危難に怖れをなして搭乗を拒避し

船鉦は未完成なのだから仕方がないとして

菊水鉦組でも裸の剥出しでお飾り無しでは醜態だから巡行に加わらないと云いだした。

○十四日・宵山

三位師実からの迎えを受けて、新吉が斎院家へ参上すると、言継卿も同座して

「放下鉦の稚児が姿を消して、町内難渋の由をな、三位卿御縁辺のさる官方が□□⁴⁸⁾名は称⁴⁹⁾するが、御内聞あらせられて、可惜祇園会に不便よとの思召から、稚児に代えるに人形を以ってしてはどうあろうかと御秘蔵の ——」

三位、操人形を示して

「稚児の代用のお飾りではな⁵⁰⁾うて、これは操人形ゆえ、然るべき遣い手があやつれば、却ってまた一段の趣きもあろうかと思はれるがの」

新吉、膝を打って

「あ！このお庭先で太平ノ舞を稚児たちに手ほどきして居りました？」

「但、彼等は、阿弥号を称するとは云え、河原者の身分じゃ。鉦に同乗させるに就いては素面の儘では憚りもある事ゆえ……

（と、黒子の頭巾を被るシグサ）」

○山路を下る僧兵⁵¹⁾の一隊

（烏合、無頼の集団）

○侍所頭人の赤松が配下から

「山を降りました僧兵の一群が、唯今、法性院に到着致しましたる旨」の報告を受けて
「祇園社は山門の支配じゃから、僧兵どもが境内に陣取るのに何の憚りも無い訳だが、策戦
は機密を要する。この方の出動命令のあるまで院内から一步も外へ出ぬ様に」

○侍所の座では、隊長が弓兵（黒装束・覆面）の一隊に

「山鉦の⁵²⁾巡行を釘ヅケに、つまり立往生させるのが役目なのだ。蹴散らす仕事の方はまた
別に備えてある。重ねて申しておくが、鉦その物えは間違^{ママ}うても矢を射かけるでないぞ。よ
いか」

○宵闇の町々に祭提灯はともされたが

山鉦には灯が入らず
僅かに山々の祭囃子があちこちに聞こえているだけ

○決行か中止か、まだ極らないまゝに時間が経って行く

新吉は、あやめから受けた傷心に堪えて、不眠不休、困憊の身体を鞭打ち、助松たち三、四
人の同志と共に月行事を、総代を、頭役を——次々と説得に歴訪する。

○死んだ様な町々が、一町内また一町内と、急にバタ〜と活気づいて来る。新吉たちの努力
が報いられて来たのだ。

人形遣いの件が纏まって放下鉦がまづ決行に同意し
次いで菊水鉦は裸屋台のまゝ、巡行に踏切り、軟禁場所を脱出したまゝ、消息不明で気を揉ませ
ていた長刀鉦の稚児が「どうしてもお稚児を勤めたい」一心から鉦にもぐり込んで寝入っ
ていたのが発見されて歓声が揚がり……町民は結束して遂に起った（船鉦一基だけは見棄てら
れた形で放置され、建造担当者の源太ひとりが思い切れないで酔泣きしながらその周辺をウ
ロ〜している）

○決行を告げる六角堂の鐘が鳴り

山鉦の提灯が次から次に点ぜられて、明々と夜空にきらめき聳え
祇園囃子が一斉に競い起った

○あやめに命ぜられて宵の口から張込んでいた権次は、いよ〜決行と見極めると、報告のた
めに走ってくる途中、御旅所に安置されている三基の神輿が、僧兵の一群によって昇ぎ去ら
れようとする現場に出喰わして仰天した。

彼等は侍所の下知に従い神輿を掠って隠匿し、山鉦巡行の目標と意義を町民から奪い去った
のである。

それと知って町々には再び動揺が生じたが、新吉は機先を制して取鎮めた。⁵³⁾

「忘れるなよッ。祇園会ではなくなったのだぞ。お祭だ、お祭だ、オレ達みんなのお祭なん

だぞ」

しかし、神輿略奪の一事から見て、不測の妨害を懸念した新吉たちは、そうした危難を避ける為にも幕府側の意表に出て、夜明けと共に巡行開始を申合わせた。

○あやめは権次から報らせを聞いて、容易ならぬ幕府の謀略を案じ、即座に意を決して権次を大津へ走らせた。

○夜を徹して準備は完了した。

暁闇

係の要員は部署につき

稚児は鉦に乗り移った

○先頭の長刀鉦には、音頭取の座に新吉と音松^{ママ}へ左手を吊っているので、胴体を紐で前掛の綱に縛りつけている。

○東山の空、朝焼雲。

○新吉、助松を見て

「それ、行くぞッ」

「おう」

颯っとかざす二人の白扇。

「えーんやアら、ヤァ！」

五十年間眠っていた巨大な鉦はゆるぎ出した

「えーんやアら、ヤァ！」

今し、東山に陽が昇り、鉦頭の長刀はその照り返しにきらめき乍ら四条通を進み始めた。

肅々と後につゞく山鉦の列（船鉦は最後尾に居座ったまゝ動かず）

長刀鉦は、やがて斎竹に近づく

稚児の白刃一閃して、斎竹の縄を切り放すと同時、それを合図に一齐に奏し始める全山鉦の祇園囃子。湧き起こる拍手と歓呼のどよめき。

「えーんやアら、ヤァ」

○突如、長刀鉦の行手から矢が射かけられ始める。

町中に聳える寺々の高屋根の向うに身を潜めた侍所の武士たちが、曳手を目がけて矢を射立て、射すくめて、前進を阻もうとする作戦である。

傷ついて倒れるもの

綱を放して逃げ出すもの

後続する山鉾の動きも同時に停止して、叫喚、混乱の巷と化す

逸れ矢が鉾へ流れて来るが、助松は身体を縛りつけているので、思う儘には射すことが出来ない。新吉、それと気附いて助松を背後に庇ひ立った時——一箭、風を斬って新吉の胸を刺す。

音松が辛うじて紐を千切り棄て、音頭の座から抜け出した瞬間、背後の支えを失った新吉の身体は崩折れて、路面に顛落した。

○逢坂ノ関

馬を煽って馳けつけて来る権次

関門の手前で馬を控えて見返ると、一文字を先頭に、続く馬借の一隊、最後はお辰の娘の手見（いづれも弓矢、手槍、野太刀の武装）

一文字、関役人を蹴散らして関門突破。

○四条通りは人影の動くものなく、物音絶えて、死の町となった。

○四条通りの突当り、祇園の楼門には紅白二旗の吹流しが高々と翻えり、石段には僧兵群が陣取っている

「われへの腕前を揮う迄の事も無かったワ。素ッ町人の分際で身の程も弁えぬ……よーし、早速ながら祝い酒なと頂こうかッ」

○山科から東山への隘路を疾駆する一文字と権次。おくれで後を追う馬借隊

○一文字と権次。蹴上から栗田口へ……京の町に入る

○僧兵たちは楼門から境内へかけて酒宴を開き、或いは興に乗じて延年などを囃し、舞う。

○四条通り。

死の町の空高く、ムク——と湧き立つ積乱雲。

○祇園社境内

一文字、馬を駆りつゝ、矢を放つ

僧兵の酒筵の酒甕に的中して打ち砕く矢

一文字、酒筵の中に馬を乗入れ、同時に後続の馬借隊殺到して僧兵たちを取り籠め、馬蹄にかけて蹂躪する

○^{マツ}棲門近くに翻る吹流しの大幟二本。

一本を一文字、一本を権次が馬上に引抜いて肩にする。

○高屋根のついでにいた弓組は、鴨川を駆け渡って来る一文字と権次を認めた

更に続いて押寄せる異様な一団を見て、大津馬借だと判断したが、その時にはすでに、吹流しをなびかせた一文字と権次は早くも下の町通りを駆け抜けており、馬借だつと周章して矢を番へるより早く馬借隊の矢に見舞われて、侍所の兵は続々、屋根から射落される。

○それと気付いた第二、第三の屋根の弓組と馬借との間にも激戦が展開されて行くにつれて肅々たる笙のひびきが起り、それを合図に小路、小路から飛出して来た弦召たちは長刀鉾に駆け寄って曳綱にかかり、或いは新吉の遺骸を戸板に載せて長刀鉾の前面に担ぎ上げる。

敏捷精悍な弦召の行動に鼓舞された町衆たちも各自の山鉾の持場に駆け戻って行く

○この時、すでに、最後尾まで駆けつけていた一文字と権次は、横丁に放置されている船鉾の、予定されていた帆柱の位置に二本の吹流しを押立てた。折柄の風に煽られた紅白の幟は長々と尾を引いて紺碧の空に翻えり靡いた。

酔っ払った源吉は狂喜して幟の下に坐り三拝九拝、^{マツ}合嘗して泣き始めた。⁵⁴⁾

○仲間に支えられて長刀鉾の音頭取りの座に立った^{マツ}音松は涙に咽ぶ声を絞って白扇をかざした。

「えーんやア、ヤア」

途端に一さわ高く吹き鳴らすあやめの^{マツ}笛をきっかけに、祇園囃子は一斉に高々と鳴りひびき、鉾はふたゝびゆるぎ出した

山が続き

鉾が続く……

それに氣勢をそそられた後尾の人々は雑多な著のみの儘で誰彼なしに船鉾の縄に取りついて力を合わせて曳き出し始めた

「えーんやア、ヤア」

「えーんやア、ヤア」

音頭を取る源太の酔眼から涙溢れてとゞまらず

「えーんやア、ヤア」

○あやめは戸板にひたりと寄り添い、死せる新吉に話しかけた

「私はあなたのものなのよ。生きて命のある限り、誰の女にもなりはしませぬ。私はあなたのもの。あなたは私のものですよ」

○ゆらめき進む鉾頭の長刀

○その同じ鉾頭の長刀が、今、大京都市の現代風景の中を東山に向って、林立するビルの空を截って進む⁵⁵⁾。

四百余年前の古ながらの姿で、昔ながらの勝利の喜びを籠めて、昔ながらの庶民の願いを籠めて――

(完)

注

1) もう一つ、伊藤大輔が典拠とした文献がわかる。第一草稿(表-8)の「山^{マツ}六十六は日本六十六ヶ国に象どる。」という台詞(話者は明示されていない)の横に、「日本民族学大系9 P218~9」という書き込みがある。この台詞は第二草稿(自筆草稿 表-9)の段階で消えてしまったが、伊藤大輔が『日本民俗学大系第9巻 芸能と娯楽』(平凡社、1958年)を参照したことがわかる。伊藤大輔文庫には、『日本民俗学大系』の第6巻と第9巻が所蔵されている(『伊藤大輔文庫目録』京都府京都文化博物館、1990年)。

なお、『日本民俗学大系』第9巻219頁に以下の文章がある。

この山鉾はこと京都の市民の幸福のためばかりではなかった。それは六六本の鉾が日本六六カ国に擬せられていることによっても、これが日本全国民の幸福のための祭りであったことを意味していよう。

2) 「映画「祇園祭」製作経過と日程」および「映画「祇園祭」製作上映協力会幹事会総会資料」は、映画「祇園祭」製作上映協力会事務局長であった堀昭三氏所蔵の資料で、別途、翻刻公開する予定である。なお、「山本明コレクション」には、「映画「祇園祭」製作上映協力会趣意書」(1968年8月)、「映画「祇園祭」製作上映協会ニュース」第5号(1968年10月27日)など協力会関係資料がある。

3) 伊藤文庫本では、「○現代の」から表題の行までを青鉛筆で四角く囲む。

4) 伊藤文庫本では、この下の空白部分に「権力と圧制に対抗して」と加筆する。「制」は「政」の誤記であろう。この加筆は、傍書ではない。

5) 伊藤文庫本では、「市民」の上に「京都」を挿入する。

6) 伊藤文庫本では、「虚構の」を抹消し、「史実に基づく」と傍書する。

7) 伊藤文庫本には、このページ右上空白部分に「Mr Fujita」と読める書き込みがある。藤田二郎京都府文化事業室長のことか。伊藤大輔夫人伊藤朝子氏が記録した『制作社日誌』(伊藤文庫所蔵)には、1968年10月9日条など複数個所に藤田氏の名が見える。例えば、10月9日、ラストシーンについての相談のために藤田氏は伊藤邸を訪問している。

8) この「●」は、「。」の打ち間違いと推測される。自筆草稿は、句点「。」である。

9) これは、『祇園執行日記』天文2年(1533)6月7日条「下京ノ六十六町ノクワチキヤチ共、

フレロ、雑色ナド皆々来候テ、神事無之共、山ホコ渡シ度事チヤゲニ候」の一節である。伊藤大輔は、この史料を引用解説する林屋辰三郎『町衆』（表-5）を読んでおり、史料引用を含む文に傍点と二重丸「◎」を付している。

- 10) 「歴史」以下「おことわり申しておきます。」までは、自筆草稿で赤字修正した後の文章である。修正前の自筆草稿は以下の通りで、伊藤大輔の史実に対するスタンスおよび祇園会解釈がよくわかる。

史実の忠実な再現ではなく、多分にフィクション化された「物語」になってはりますが、映画では更にこれを「京町衆」だけと限らず、この町に生活する一切の住民、京都全市民の勝利であると考へたい。言葉をかへて言へば、京町衆と呼ばれる一部特定市民以外の全住民の協力によって捷ち得られたものであるとの見解にまで拡張して描きたい。その為には原作を改変し、史実を歪曲する暴戻をも寛容して頂きたい。

- 11) 伊藤文庫本では、「豪」を「部」と鉛筆で修正する。自筆草稿は「豪」とする。
- 12) 伊藤文庫本では、「シュク」と傍書する。
- 13) 伊藤文庫本では、「セ」と修正する。自筆草稿は「セ」とする。
- 14) 伊藤文庫本では、「？」と傍書する。自筆草稿は「固守」とする。
- 15) 一文字空白。原本には□の表記はない（以下、同様）。伊藤文庫本は、「常」と傍書する。自筆草稿は「遊」とする。
- 16) 二文字空白。自筆草稿は「■から」とする。■は「既」にも見えるが、読み方が不明である。「予てから」の書き間違いか。
- 17) 自筆草稿は「警戒」とする。
- 18) 映画には、庭師の善阿弥が、あやめの父という設定で登場する。
- 19) 伊藤文庫本では、この「既程の事実」の五文字に傍点を加筆する。
- 20) 自筆草稿は「所在」とする。
- 21) 上部の空白部分に、「up」「T」「1500B.C」「10」「20」「30」「1530B.C」などの文字・数字の書き込みがある。「B.C」は「A.D」の間違いであろう。
- 22) 伊藤文庫本では、「ゲラ―笑ひ乍ら銅鑼を叩いて歩む」と加筆する。
- 23) 一文字空白。伊藤文庫本では、「徊」を書き入れる。自筆草稿も「低徊」とする。
- 24) 伊藤文庫本では、「原」を挿入する。自筆草稿は、「焼野」とする。
- 25) 伊藤文庫本では、続けて「？ 火箭を射上げる」と加筆する。
- 26) 映画では、後に出て来る「お辰姥」と合せた人物設定で熊左という名で登場し、三船敏郎が演じている。
- 27) 伊藤文庫本では、「？ ソラリゼーションによる半反転でF. out」と傍書する。自筆草稿では、白紙（伊藤用箋・ナンバリングあり）が一枚挟まれる。
- 28) 伊藤文庫本では、「今度は」から「深めた」までの段落上部を囲む線が引かれている。
- 29) 山科言継（1507～1579年）は、蔵人頭（くろうどのとう）ではない。後に出て来る「内蔵頭」（くらのかみ）と混同したものと思われる。
- 30) 馬借の頭を女性に設定している点は、当時の任侠映画の状況と合わせて考えると興味深い。その娘「手児」とともに映画には採用されなかった。原作、未定稿Ⅰ・Ⅱとも、馬借の頭は熊左である。
- 31) 伊藤文庫本は、「（支倉屋以下）から「この儘では祭どころの話ではなくなるが……」までの4

頁分（原本の27～30頁）が抜けている。

- 32) 一文字空白。自筆草稿には、文字や欠字はない。
- 33) 伊藤文庫本では、ここまでが欠落している。
- 34) 自筆草稿では、「酒屋」とする。
- 35) 伊藤文庫本では、「そこで」から始まる助松の台詞部分を赤鉛筆線で囲む。
- 36) 伊藤文庫本では、「○支倉屋」から「掲げられたのであった。」までを赤鉛筆線で囲む。
- 37) 自筆草稿は、「人望」とする。
- 38) 自筆草稿は、正しく「言継」とする。
- 39) 自筆草稿は、「懇望」とする。
- 40) 二文字分空白。自筆草稿では「一」（縦棒）となっていて、文字はない。
- 41) 注(8)に同じ。
- 42) 自筆草稿は、「神輿」とする。
- 43) 自筆草稿は、「どうなのだ?」とする。
- 44) 自筆草稿は、「祭」とする。活字化の段階で、伊藤大輔の書く「祭」を「會」（会の旧字）と誤読したものと考えられる。新吉の台詞が自筆草稿の通りに「神事を抜きにした祇園祭をやるう！」だとすると、祇園会から山鉦巡行を独立させ、新たに祇園祭と名付けるのだ、という意味になる。これは、伊藤大輔の構想において重要な論点である。前掲、拙稿を参照されたい。
- 45) 注(8)に同じ。
- 46) 注(8)に同じ。
- 47) 自筆草稿は、「乗り出して来てくれるならば……」とする。
- 48) 注(40)に同じ。
- 49) 自筆草稿は、「秘」とする。
- 50) 自筆草稿は、「無」とする。
- 51) 鈴木尚之・清水邦夫執筆の原脚本（最終版 表-15）にも僧兵が出て来るが、実際の映画には出て来ないことに注目される。前掲、拙稿を参照されたい。
- 52) 伊藤文庫本では、この開闢の台詞の上部を囲うように赤線が引かれている。なお、山鉦に対して弓を射る演出については、映画「祇園祭」製作上映協力会幹事であった高原美忠八坂神社宮司が抗議を申し入れている（『毎日新聞』1968年9月17日付記事など）。
- 53) 自筆草稿は、この後を欠いている。
- 54) 伊藤文庫本には、この次の行間に、「あやめ満眼の涙、扇動の一吹——最後の船鉦へまで次第に高く。最強音となって響き傳はる。■を傳め■に和はる囃子の蘇へり」と赤鉛筆の書き入れがある。助松による長刀鉦の音頭発声の前にあやめの笛の音と祇園囃子を配置しよう、という意図であろう。
- 55) 伊藤大輔は、ラストシーンを現代の山鉦巡行の実景にすることにこだわった。中世において京町衆の自治が勝利した延長線上に現代の山鉦巡行を位置づけることで、京都府政の百年を祝祭する意図があったものと思われる。しかし、実際の映画では、原作通り、大文字の送り火がラストシーンとなった。拙稿「制作社日誌からみる映画『祇園祭』——歴史学的分析の試み——」（谷川建司編『映画産業史の転換点』森話社、2020年）を参照されたい。

要 旨

映画「祇園祭」（1968年11月23日封切り）は、室町時代の京町衆が多く困難を乗り越えて祇園会を再興する様を描き、158万人を超える観客を得て大ヒットした時代劇映画である。独立プロ製作のこの作品には、時代劇のスター俳優、中村錦之助、三船敏郎らが出演し、「時代劇の父」と呼ばれる映画監督伊藤大輔が製作の中心にいた。映画のテーマは1960年代の社会状況とも響き合い、製作協力券の購入などを通じて市民が映画製作に参加した。

この映画の脚本は専門誌上で刊行公開されているが、もう一つ別のストーリーが存在する。伊藤大輔が執筆した小冊子「映画「祇園祭」—— 物語の輪郭 ——」である。表紙・裏表紙が深い赤色のこの本を、伊藤大輔自身は「赤本」と呼んでいた。

この「赤本」には、伊藤大輔が1962年から温めつづけた映画「祇園祭」の構想が記されている。京町衆が自治に目覚め、山門（比叡山延暦寺）や幕府の妨害に対抗して祇園会を新たに「祇園祭」として復興する。その民衆のエネルギーは、現代の祇園祭、山鉾巡行に引き継がれるものであった。過去と現在をつなぐ物語は、京都府政百周年記念事業にふさわしい内容である。

しかし、伊藤大輔は映画「祇園祭」の監督を途中で降板し、完成した映画は伊藤大輔の意図とは異なるストーリーとなった。「赤本」は、幻に終わった伊藤大輔の「祇園祭」を記録する唯一の資料である。

この「赤本」は、京都府立京都市・歴史館および京都文化博物館内伊藤大輔文庫に各1冊ずつ所蔵されている。しかし、未だ公刊物とはなっていない。

ここに、「赤本」を伊藤大輔文庫所収の自筆草稿、自筆メモなどの情報を注記しながら翻刻・紹介する。映画監督伊藤大輔の思考の軌跡を確認し、戦後民主主義の歴史を語る作品をさらに深く分析するための基礎作業である。

キーワード: 映画「祇園祭」、伊藤大輔、祇園会再興、物語の輪郭

Summary

The movie “Gion Matsuri”, the English title is “THE DAY THE SUN ROSE” (released on November 23, 1968) is a period movie that depicts the reestablishment of the Gion Matsuri Festival by Kiyomachi-shu of the Muromachi period (16 century) after overcoming many difficulties.

There was another story in this movie besides the ones shown.

“The movie “Gion Matsuri Festival” — the outline of the story —” is a booklet written by Daisuke Ito.

In this booklet, the Kiyomachi-shu (the merchant class of Kyoto) revived the Gion Matsuri Festival as a symbol of self-governing to counter obstruction by the Sanmon (Hieizan Enryaku-ji Temple) and the Muromachi Shogunate. The people's energy was taken over by the current Gion Matsuri Festival and Yamahoko Junko. The story that connects the past and the present is suitable for a project to commemorate the 100 year anniversary of the Kyoto prefectural government.

This booklet has not been published yet. Therefore, I would like to reprint and introduce this booklet with some notes, including a handwritten memo and a handwritten draft written by Daisuke ITO.

This is a basic task to further analyze his work on the history of civic movement in postwar democracy.

Keywords: The movie “Gion Matsuri”, The movie “THE DAY THE SUN ROSE”, Gion Matsuri Festival, Daisuke Ito